

## 研究概要

### 「情報環境の変化に適切に対応する目録規則の在り方に関する研究」

#### 1. 研究計画の背景

1960～70年代に確立された目録規則の基本的枠組みは、情報のデジタル化・ネットワーク化が急速に進む中で、抜本的な再構築の必要性に迫られてきた。本研究を計画した2009年においては、次のような状況下にあった。

IFLA（国際図書館連盟）は、書誌的世界の概念モデルであるFRBR（書誌レコードの機能要件）を1997年に発表し、また今世紀に入って「国際目録原則」の策定やISBD（国際標準書誌記述）の見直しを行ってきた。FRBRは目録規則再構築の核心と広く認知されているが、典拠データへの拡張やオブジェクト指向モデル化等の見直しはまだ進行中であった。一方、AACR2（英米目録規則第2版）を抜本改定する新規則RDA（Resource Description and Access）は、2008年に全体草案が出され、刊行を待つ状態であった。

これらの動きには多くの研究者・実務者が加わっている。しかし、学術研究発表としては、背景や要件を述べる総論的なもの、FRBRモデルの応用に関するものを除くと、海外でも多いとはいえ、実務的に進展しているにも関わらず研究の余地が多く残されているように思われた。また、博物館・文書館・Webの世界など他のコミュニティで作られるメタデータとの接合も大きな問題となっていたが、個別のクロスウオークの開発を除くと、総合的な検討が進んでいるとはいえなかった。

一方、わが国の標準目録規則である「日本目録規則（NCR）」についても抜本的再構築を迫られているが、2009年時点では具体的な改訂作業はまだ行われていなかった。NCRは国際標準を考慮しながらも、非基本記入方式や書誌階層など重要な点で独自の展開をしてきている。そのため、見直しにおいても独自の理論的・実践的検討が必要であるが、そうした研究も乏しかった。

#### 2. 本研究と「情報組織化研究グループ」

「日本図書館研究会情報組織化研究グループ<sup>1</sup>」は、1957年に活動を開始した「日本図書館研究会整理技術研究グループ」が2008年に名称変更したもので、大阪を拠点として、資料（情報）組織化領域全般を対象に研究活動を行ってきた。本研究の研究代表者である渡邊隆弘は情報組織化研究グループの代表をつとめており、研究分担者・協力者の多くも同グループの運営に携わってきたメンバーである。

情報組織化研究グループは概ね2年単位で研究テーマを定めて活動しており、目録規則はその主要対象の一つであった。また、新たな情報技術の世界と図書館情報学との接点についても研究を重ねてきた。本研究のテーマと問題意識は、同グループの活動の中で育まれてきたものであり、研究開始後も同グループとの関係のもとで研究活動を進めることとなった。

---

<sup>1</sup> <http://josoken.digick.jp/>

参考) 情報組織化研究グループの年度ごとの研究テーマ (2003 年度以降)

目録規則関係: 「最近における目録規則改訂動向」(2003), 「目録規則再構築の動向」(2004), 「新時代の目録規則」(2009-2010), 「変革期の目録法」(2011-2012)

目録の動向: 「図書館目録の将来設計 (次世代の目録システム等)」(2007-2008)

新たな情報技術と図書館情報学: 「セマンティック Web と資料組織法」(2005-2006)

### 3. 研究の目的

本研究は、目録規則 (図書館の情報資源に関わるメタデータ規則) を、情報環境の進展によって顕在化した諸要求—すなわち (1)適切な概念モデル及びデータモデルに基づく機械可読性, (2)多様な情報資源のシームレスな取扱い, (3)変化する利用者行動の適切な分析とこれへの対応, (4)他のコミュニティで用いられる規則との相互運用性—を踏まえて捉え直し、今後の在り方を理論的・実践的の両側面から明らかにすること、さらに、重要な点で独自の展開をしてきたわが国の目録規則の、今後の変革に資する理論的・実践的基盤を構築することを目的とする。

より具体的には、次の内容を目標とした。

#### ●概念モデルの在り方

FRBR について、オブジェクト指向モデル化や典拠データへの拡張など進行中の動向も踏まえて検討し、書誌的世界の概念モデルの在り方を検討する。

#### ●目録規則の構造の在り方

RDA を対象として、依拠する概念モデル (FRBR) と規則構造との関係、これの全体構造と個々のエレメントの妥当性、これと他のコミュニティのメタデータとの相互運用性、これの適切なエンコーディング法 (RDA ではエンコーディング法を規定しない)、等を分析・評価する。

#### ●わが国の目録規則の方向性

わが国の目録規則の歴史の中で生み出されてきた独自性も踏まえて、今後の抜本的改訂の方向性を検討する。なお東アジアでは、韓国・中国も英語圏とは異なる独自の目録規則を運用しており、これらの国の規則との比較検討も視野に入れる。

### 4. 研究経費と研究組織

研究題目: 情報環境の変化に適切に対応する目録規則の在り方に関する研究

研究期間: 2010 年度～2012 年度

#### ●研究経費 (補助額)

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
2012 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

## ●研究組織

研究代表者： 渡邊 隆弘（帝塚山学院大学人間科学部）  
研究分担者： 田窪 直規（近畿大学短期大学部）  
研谷 紀夫（東京大学情報学環（～2012.3）  
                  関西大学総合情報学部（2012.4～））  
松井 純子（大阪芸術大学芸術学部）  
吉田 暁史（大手前大学総合文化学部）  
和中 幹雄（大阪学院大学国際学部） \*2012年度

研究協力者：情報組織化研究グループ運営メンバー

川崎 秀子（佛教大学）  
河手 太士（静岡文化芸術大学）  
田村 俊明（紀伊國屋書店）  
堀池 博巳  
横谷 弘美（大手前大学）  
その他  
古川 肇（近畿大学）  
中井万知子（国立国会図書館）  
原井 直子（国立国会図書館）  
崔 錫斗（韓国・漢城大学）  
李 常慶（中国・北京大学）

注）和中は、2011年度までは研究協力者。

研究協力者としては、計画当初より継続して関わっていただいた方を記載した。他に、個別の研究会に加わっていただいた協力者もあるが、列挙は省略する

## 5. 研究活動

共同での研究活動は、主として公開研究会の形で行った。公開研究会は日本図書館研究会情報組織化研究グループと共催の形で行い（一部、情報知識学会関西部会と共催したものもある）、開催回数は2010年度に7回、2011年度に9回、2012年度に10回の計26回であった。各回2時間半程度の時間をかけ、90～100分の発表と討議を行った。開催状況を次ページに一覧し、さらに概要を「公開研究会記録」（p.8～）にまとめて掲載する。

このうち2010年度第7回は「東アジアの目録規則」をテーマに「国際研究会」として開催した。中国と韓国から研究協力者を招き、研究代表者を含む3人の発表者で、日中韓3カ国の目録規則に関する発表とパネルディスカッションを行った。この回については「国際研究会記録」（p.39～）として、テープ起こし等による詳細記録を掲載する。

なお、2010年度第2回に研究代表者が「情報組織化における最近の動向」を発表しているが、図書館目録をめぐる内外の状況をできる限り整理し、研究グループで共有するようしてきた。その一部を「図書館目録をめぐる動向：2007～2012」（p.106～）として掲載する。

## 公開研究会一覧

回	開催日	テーマ	発表者
2010 年度			
1	2010.4.24	統制形データの概念モデル (FRAD と FRSAD) の概要について	和中幹雄 (同志社大学)
2	2010.5.15	情報組織化をめぐる最近の動向	渡邊隆弘 (帝塚山学院大学)
3	2010.7.17	ネットワーク文化情報資源で活用する人名典拠情報構築に関する研究とその成果	研谷紀夫 (東京大学)
4	2010.10.23	中国と韓国における目録をめぐる動向	小島浩之 (東京大学) 高橋菜奈子 (国立情報学研究所)
5	2010.11.13	RDA の完成とこれからの目録	古川肇 (近畿大学)
6	2010.12.18	新しい目録規則から得られるもの：機械可読性の視点から	渡邊隆弘 (帝塚山学院大学)
7	2011.1.8	東アジアの目録規則 (国際研究会)	李常慶 (北京大学) 崔錫斗 (漢城大学) 渡邊隆弘 (帝塚山学院大学)
2011 年度			
1	2011.4.16	Dublin Core のこころ	杉本重雄 (筑波大学)
2	2011.6.25	FRBR 研究会の取り組み：著作同定作業の試み	谷口祥一 (筑波大学)
3	2011.7.16	20 世紀前半の米国におけるアーカイブズと図書館の関係：目録・分類法を中心に	坂口貴弘 (京都大学)
4	2011.9.24	国立国会図書館の典拠データ提供の新展開	大柴忠彦 (国立国会図書館)
5	2011.10.22	識別と記述のフレームワーク	宮澤彰 (国立情報学研究所)
6	2011.11.19	KOSMOS III における目録システムの設計	古賀理恵子 (慶應義塾大学)
7	2011.12.17	書誌コントロールの新たなフレームワークに向けた課題整理	和中幹雄 (大阪学院大学) 渡邊隆弘 (帝塚山学院大学)
8	2012.1.28	GUI を用いた関連語編集機能とメタデータへの関連語登録機能を実装した Digital Cultural Heritage の実践例	研谷紀夫 (東京大学)
9	2012.3.24	目録はどうなる：目録作成利用環境の構造転換	上田修一 (慶應義塾大学)
2012 年度			
1	2012.4.14	国立国会図書館ダブリンコアメタデータ記述 (DC·NDL) 解説講座	柴田洋子 (国立国会図書館)
2	2012.5.26	ISBD の現在・過去・未来－ISBD 統合版を中心に	松井純子 (大阪芸術大学)
3	2012.6.23	国立国会図書館サーチ：その開発経緯・機能・特長・今後	原田隆史 (同志社大学)
4	2012.7.21	アーカイブズの典拠レコード標準 ISAAR (CPF) と RDA との関係	寺澤正直 (国立公文書館)
5	2012.9.29	オープンソースのアーカイブ資料情報管理システムの日本語化と試用	五島敏芳 (京都大学)
6	2012.10.20	九州大学附属図書館のディスカバリ・サービスとメタデータ管理	香川朋子 (九州大学)
7	2012.11.24	索引の構造について	田窪直規 (近畿大学)
8	2012.12.15	典拠形アクセスポイントの諸相	古川肇 (近畿大学)
9	2013.1.12	ISBD 統合版の研究：改訂内容の検討とその意義	松井純子 (大阪芸術大学)
10	2013.2.23	新しい「日本目録規則 (NCR)」へ	原井直子 (国立国会図書館)

## 6. 成果発表

研究代表者・研究分担者による外部成果発表は、以下の通りである（発表順）。

### ●論文

1. 松井純子「RDA 改訂に見る FRBR の具体化：新時代の目録規則を考える」『図書館界』62(2), p.182-192, 2010.7. ☆
2. 渡邊隆弘「典拠コントロールの現状と将来」『情報の科学と技術』60(9), 2010.9. p.371-377. ☆
3. 研谷紀夫「Digital Cultural Heritage における分類と新しい情報知識体系の可能性」『現代の図書館』48(4), 2010.12, p.245-252. ☆
4. 渡邊隆弘「「国際目録原則覚書」策定過程の諸論点：草案の変遷から」『資料組織化研究-e』59, p.1-12, 2010.12. ☆
5. 渡邊隆弘「新しい目録規則（RDA）から得られるもの：機械可読性の視点から」『図書館界』63(2), 2011.7, p.114-121. ☆
6. 和中幹雄「「決定を RDA 刊行後に持ち越した課題」から見る RDA の方向性（1）「転記の原則」をめぐって」『資料組織化研究-e』61, 2011.10. p.10-30. ☆
7. 渡邊隆弘「典拠コントロールとオントロジー：豊かな情報アクセスのための基盤」『情報の科学と技術』61(11), 2011.11. p.434-440. ☆
8. 和中幹雄「書誌コントロールの戦後体制に関する覚書」『資料組織化研究-e』62, 2012.4. p.11-23. ☆
9. 和中幹雄「書誌コントロールの新たなフレームワークに向けた課題整理」『図書館界』64(2), 2012.7. p.122-132. ☆
10. 和中幹雄「RDA をめぐる最新状況と目録法の課題整理」『TP&D フォーラムシリーズ』21, 2012.8. p.11-23. ☆
11. 和中幹雄「決定を RDA 刊行後に持ち越した課題」から見る RDA の方向性（2）RDA 本格導入直前の改訂作業について（その 1）『資料組織化研究-e』63, 2013.2. p.11-31. ☆
12. Norio Togiya “Trends in digital cultural heritage in Japan 1990-2012” *Art Libraries Journal*, (in press)

### ●口頭発表

1. 渡邊隆弘「目録規則をめぐる今日的状況」2010 年度全国図書館大会第 13 分科会（目録）, 2010.9.17.
2. 研谷紀夫「デジタルカルチュラルヘリテージ構築のためのガイドライン」日本教育情報学会, 日本博物館協会「博物館デジタル・アーカイブの未来」, 2010.12.10.
3. 渡邊隆弘「新しい目録規則から得られるもの：機械可読性の視点から」第 52 回日本図書館研究会研究大会, 2011.2.19. （論文 5 と同内容）
4. 田窪直規「MLA 連携について：情報組織化をも意識して」情報組織化研究グループ 2011 年 5 月例研究会, 2011.5.14. ☆
5. 和中幹雄「書誌コントロールの新たなフレームワークに向けた課題整理」第 53 回日本

図書館研究会研究大会, 2012.2.19. (論文 9 と同内容)

6. 研谷紀夫「アーカイブズの電子情報化とその課題」全国歴史資料保存利用機関連絡協議会第 38 回全国(広島)大会, 2011.11.8. ☆
7. 研谷紀夫「『電子研究図誌』としての電子書籍の可能性」アート・ドキュメンテーション学会第 5 回秋季研究会予稿集, 2012.12.2.
8. 松井純子「ISBD 統合版の研究：改訂内容の検討とその意義」第 54 回日本図書館研究会研究大会, 2013.3.3. ☆

### ●その他の執筆

1. 渡邊隆弘「整理技術と書誌情報」『図書館年鑑 2010』日本図書館協会, 2010.7. p.115-117.
2. 渡邊隆弘「〈座標〉新しい「日本目録規則」へ」『図書館界』62(5), 2011.1. p.333.
3. 田窪直規編著, 渡邊隆弘ほか著『情報資源組織論』樹村房, 2011.4. 209p. (現代図書館情報学シリーズ)
4. 渡邊隆弘「整理技術と書誌情報」『図書館年鑑 2011』日本図書館協会, 2011.7. p.117-119.
5. 和中幹雄「RDA：ウェブの世界に乗り出す目録規則(解説)」『カレントアウェアネス』311, p.16-17.
6. 渡邊隆弘「整理技術と書誌情報」『図書館年鑑 2012』日本図書館協会, 2012.7. p.116-118.
7. 研谷紀夫「資料化, 情報化, デジタル化」『博物館学Ⅲ』学文社, 2012.11. p.82-97. (博物館学教科書)

\*末尾に☆を付したものは, 本報告書 (p.130～) に論文または予稿を採録

## 7. 研究目的と研究活動・成果

研究目的 (3.) と, 研究活動 (5.), 研究成果 (6.) との関連について述べる。

\*公開研究会, 論文発表, 口頭発表は, 5. 及び 6. の一覧に付した番号を用いて [研究会 2010-1] [論文 1] [口頭 1] のように表す。

### ●概念モデルの在り方

FRBR モデルについて, [研究会 2010-1] [研究会 2011-2] で扱った。また, [研究会 2011-5] [2011-9] [2012-7] ではより大きく, 今後の目録の基盤となる枠組みの検討や, 索引の原理的検討を扱った。

概念モデルとの関わりで重要な典拠コントロールについて [論文 2] [論文 7] を, FRBR モデルを基盤としている「国際目録原則」について [論文 4] を, いずれも渡邊が発表している。

ただ, FRBR モデルそのものやそのオブジェクト指向モデル化等を原理的に追求する研究成果までは至らなかった。

### ●目録規則の構造の在り方

研究開始直後の 2010 年 6 月に公刊された RDA について, [研究会 2010-5] [研究会 2010-6] [研究会 2011-7] [研究会 2012-8] で扱った。また, 松井による [論文 1], 和

中による [論文 6] [論文 9] [論文 10] [論文 11], 渡邊による [論文 5] は, RDA を扱ったものである。

また, 2011 年に「統合版」が発表された ISBD (国際標準書誌記述) について, [研究会 2012-2] [研究会 2012-9] で扱い, 松井が [口頭 8] を行った。和申による [論文 8] は, 戦後の国際的な書誌コントロール体制の歴史的展開を扱っている。

RDA の規則構造と評価, FRBR モデルとの関係, MARC21 フォーマットの問題も含めた機械可読性, 実装に向けた動向, 典拠形アクセスポイント, ISBD 統合版の分析・評価等, この課題については様々な角度から一定の研究を積み重ねることができた。

### ●わが国の目録規則の方向性

研究初年度に [研究会 2010-4] [研究会 2010-7] を開催し, 日中韓の目録規則を扱った。特に後者は中国・韓国から専門家を招いた国際研究会で, 非基本記入制など世界的には珍しい特徴を共有する 3 カ国の規則について相互理解を深め, 今後の目録規則のありかたを相対性をもって考えて行く基礎を得られた。

日本目録規則 (NCR) については, [研究会 2012-10] で日本図書館協会目録委員会の委員長を招いて扱った。本研究の最終盤でと開催となり, NCR の今後について研究期間中にまとまった研究成果を出すには至らなかった。なお, 和申による [論文 8] はわが国の戦後の目録規則, 書誌コントロールの変遷についても扱っている。

その他, [研究会 2011-4] [研究会 2011-11] [研究会 2012-3] [研究会 2012-6] で, 国立国会図書館や大学図書館の目録に関する動向を扱った。

### ●その他：他のコミュニティのメタデータとの関係

3. でも述べたように, 他のコミュニティのメタデータとの相互運用性は, 今後の目録規則を考えるうえで重要である。このため, [研究会 2010-3] [研究会 2011-8] で「文化情報資源」のメタデータを, [研究会 2011-3] [研究会 2012-4] [研究会 2012-5] でアーカイブズ (文書館) のメタデータを, それぞれ扱った。研究組織内では研谷が文化情報資源を専門としており, [論文 3] [口頭 2] [口頭 6] はその成果である。また, 田窪による [口頭 4] は, MLA 全般の情報組織化に触れている。

最も汎用的に用いられている記述的メタデータである「ダブリン・コア」について, [研究会 2011-1] [研究会 2012-1] で扱った。

## 8. ウェブ上の情報公表

本報告書の内容及び関連情報は, ウェブサイト上でも公開する。

<http://www.tezuka-gu.ac.jp/public/libsci/kaken2010.html>